

マサノ沢遺跡(本発掘調査B)

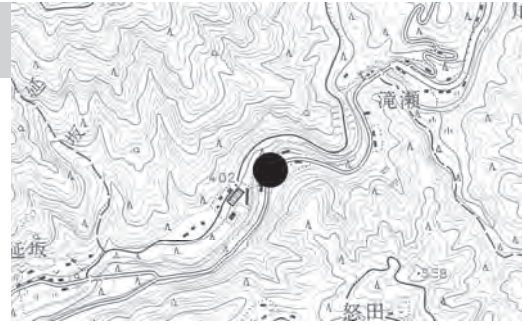
所在地 北設楽郡設楽町大字小松字マサノサワ
(北緯35度7分4秒 東経137度34分35秒)

調査理由 設楽ダム

調査期間 平成29年7月～平成30年1月

調査面積 2,050㎡

担当者 鈴木正貴・永井宏幸



調査地点(1/2.5万「田口」)

調査の経過 遺跡は大正12年頃の開墾で発見され、ついで昭和23から24年の開墾時に多量の土器・石器が出土し注目された。その後、平成17年に行われた県道設楽根羽線の改修工事に伴う試掘および立会い調査では、明確な遺構・遺物包含層は認められなかった。平成29年度発掘調査A(範囲確認調査)の成果を踏まえて本年度の調査は、国土交通省による設楽ダム建設事業関連埋蔵文化財調査として、愛知県教育委員会を通じた委託を受けて平成29年7月から平成30年1月にかけて実施した。

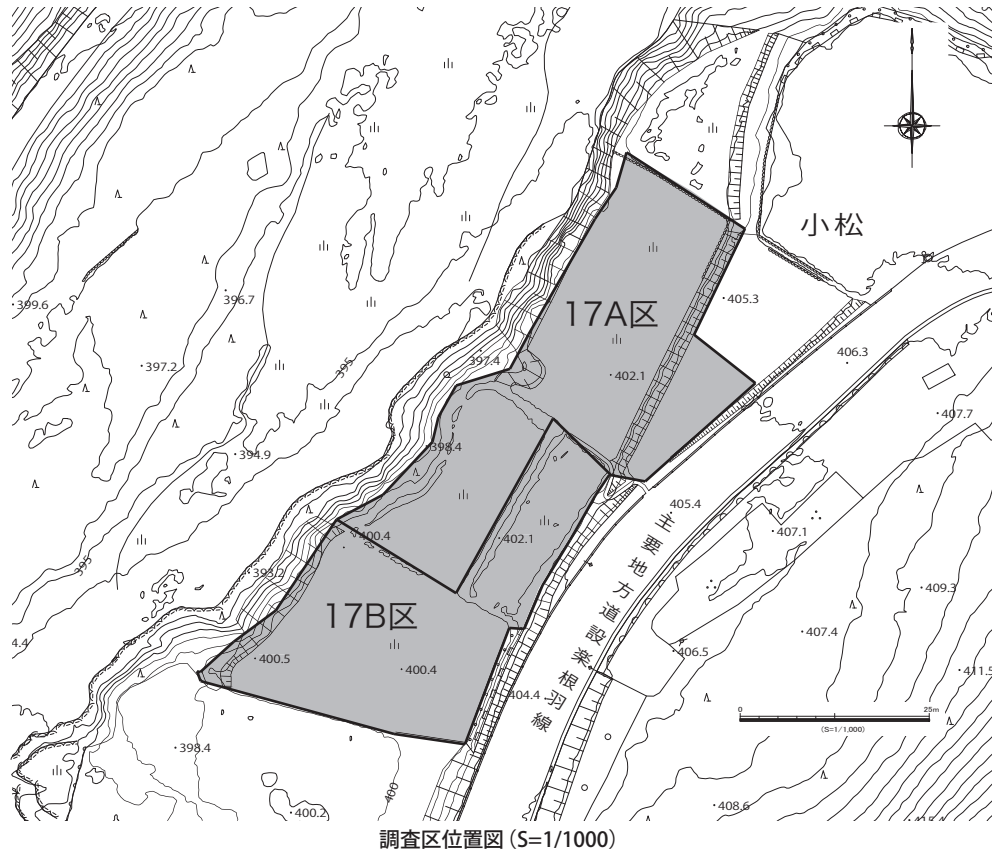
立地と環境 遺跡は、豊川水系に属する寒狭川の支流である境川の左岸に形成された幅狭な段丘面に位置する。遺跡付近は山腹に造成された県道によって地形が改変されたものの、境川が大きく蛇行する地点にあたり、北東から南西にかけて広がる緩やかな緩斜面に立地する。調査着手前は県道をはさんで山側に茶畑と山林、川側に水田・畑地および宅地があった。調査対象地の標高は一番高い道路際の北東寄り地点で405m前後、川側の低い南西寄り地点で400m前後である。

調査の概要 遺跡の基本層序は、A区北東の最上段部分を除き概ね以下の土層が上位から下位へ堆積していた。現況の水田、畑地などを中心とする耕作土、床土の下に、黒色土層(縄文晩期末～弥生前期を中心とする包含層)、褐色土層(縄文後期を中心とする包含層)、褐色～黄褐色土層の漸移層(基盤層)、黄褐色土層(基盤層)と続く。耕作土+床土を重機により取り除いた後、遺構検出を行った。しかし、黒色土～褐色土層までの上位層は安定しておらず、現代の開墾などによって削平されていた。

調査の結果、縄文時代後期を中心とする墓地関連遺構と縄文時代晩期後葉から弥生時代前期にかけての土器棺墓が確認された。以下、その概要を示す。

A区北東の県道に接する緩斜面地は、縄文時代後期から近世の遺物を含む包含層が確認された。調査当初は県道拡幅時の造成により大きく削平されていたと考えていた。しかし、この造成土の下位から現代の開墾時による整地土が厚く堆積しており、現況より1m以上現代の堆積があった。調査区土層断面観察の結果、この堆積は大きく地盤を改変するのではなく、緩斜面地に整地土を盛ったと考えられる。遺物はこれら整地土の中からも多く出土している。縄文時代晩期後葉の小型壺、平安時代の灰釉陶器瓶類などを含む堆積層は、道路の山側にあった旧茶畑辺りの堆積層を県道周辺の造成土に利用したと考えられる。これら現代の堆積層を除去して緩斜面を確認すると数カ所で遺物の集積する場所と遺構を検出した。おそらく縄文時代後期と考えられるが、斜面地堆積なので自然の凹凸部分を遺構として認識した可能性も含めて再検討が必要である。

縄文後期 縄文時代後期を中心とする遺構は、A区南寄りからB区にかけて展開していた。今回の調査で確認した遺構のうち9割以上が相当する。後期の遺構は160SXとした集石遺構



調査区位置図 (S=1/1000)

160SX を核とした配置が想定される。山側の頂点に位置する160SXは長軸(東西)7m、短軸(南北)4mの範囲に巨礫および大礫が集積していた。そのうち3×2m前後の範囲は、平石を選んで平らに配置した箇所が確認できた。礫を取り除いて、下位の遺構を確認したところ、4ヶ所の径2m前後の浅い円形遺構を検出したが、炉を付属する竪穴建物ではなかった。

縄文時代後期を中心とする遺構群は、炉を付属する竪穴建物が確認できなかった。これはマサノ沢遺跡の特筆すべき点である。焼土あるいは被熱した礫は点在するが、石囲炉や被熱した礫が詰まった集石遺構などはなかった。むしろ焼土や炭化物に伴って細片化した土器を包蔵する固く締まった堆積層が160SX周辺に広がっていた。この堆積層は整地層の可能性もある。

竪穴建物のない大小合わせて400を超える円形および長楕円形からなる遺構群はどのような性格の遺構であったのか。A区南寄りの遺構検出時に4m前後のやや不定形な円形プラン094SXを検出した。当初は長楕円形の土坑からなる一部基盤層が持ち上がったいわゆる風倒木痕を想定した。慎重を期し、十文字にトレンチを入れて土層断面確認したところ、堆積の中位から下位にかけて箱形の断面形と、この断面形の内法に沿う平石を検出した。そこで、大型土坑内を全体に掘り下げ、断面箱形の平面プランを探った。結果、190SKと191SKの2箇所でも長方形のプランを検出した。長方形の土坑をさらに掘削すると平石をプランの内法に沿った礫が確認できた。190SKは短辺も長辺も礫を立てて配置した状態で出土し、191SKはほぼ掘り方の輪郭に沿って礫が配置されていた。土坑の上面および底面に礫は配置されていなかった。その規模は長軸方向1.5m、短軸方向0.5mを測る。当初の円形プランの段階から二つの土坑は確認できなかった。構築順を推定すると、(1)大型の円形土坑を掘削、(2)礫を配置し長方形の土坑を2基設営、(3)その後上位を覆う。縄文

時代後期に所属する礫を長方形配置した土坑は愛知県内では初例である。県外周辺の類似例としては、長野県飯田市中村中平遺跡などがある。中村中平遺跡は河岸段丘上に縄文時代後晩期の配石あるいは集石を伴う墓壇が多数確認されている。また人骨と獣骨がこれらの墓壇に伴って大量に出土している。

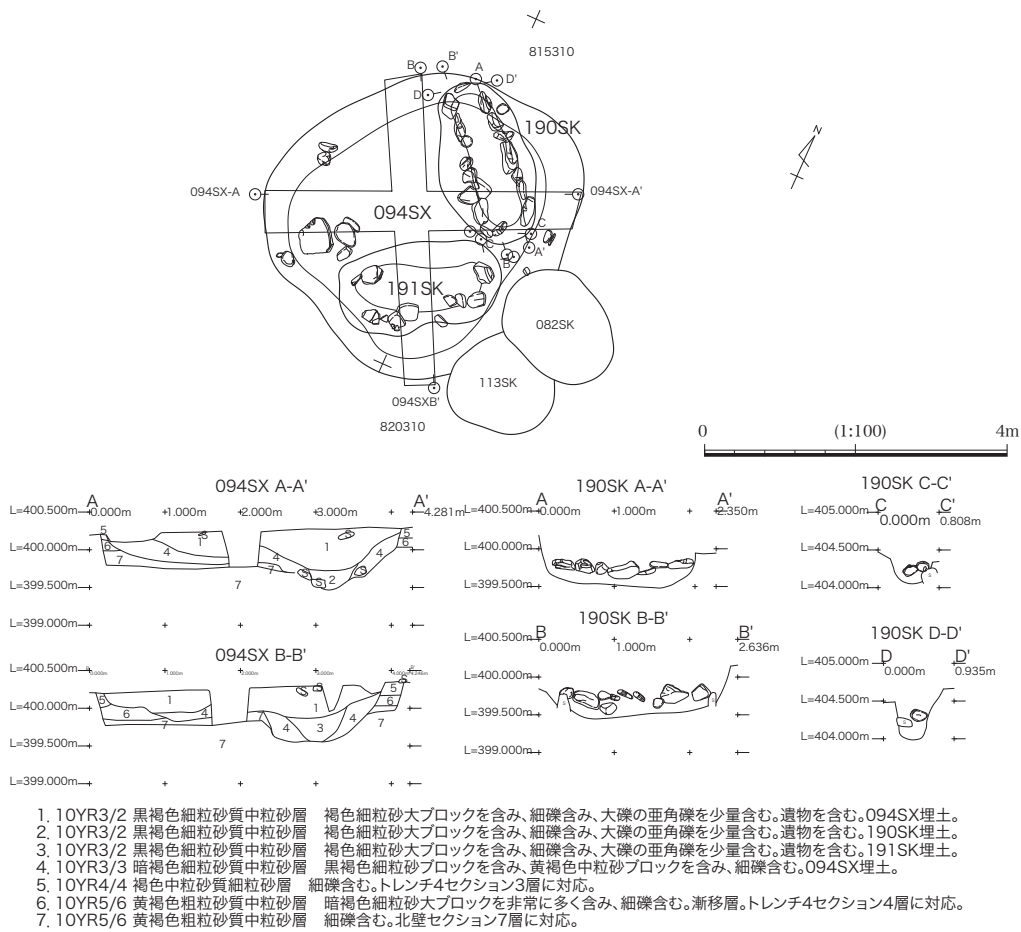
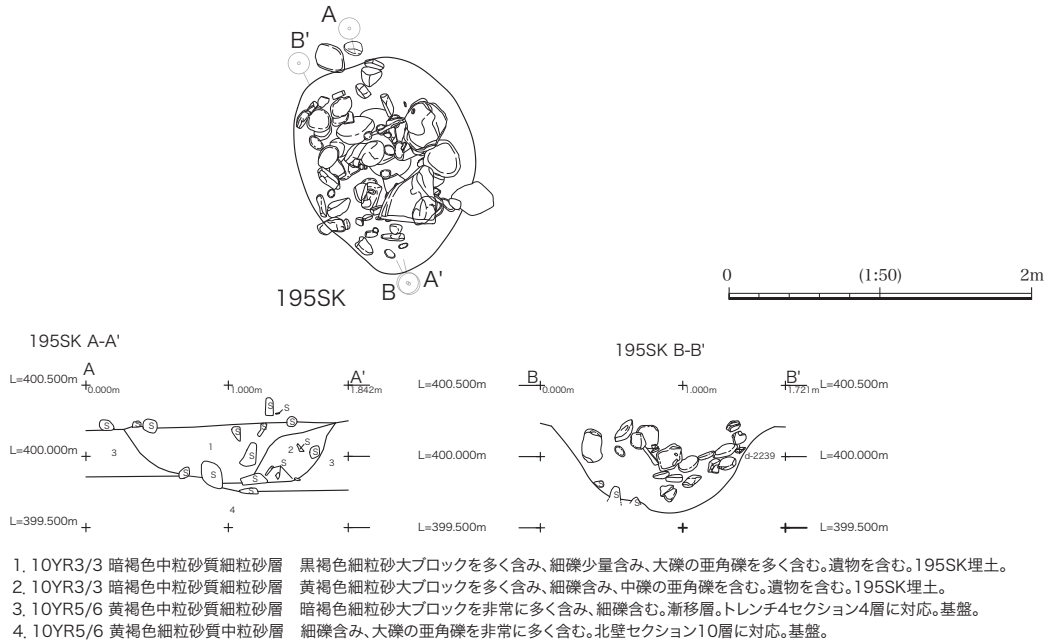
- 195SX マサノ沢遺跡の礫を伴った遺構はその後20例を超えた。そのうち、195SKは注目できる。土坑の掘り方に平石を貼り付けるように配置し、さらに土坑内に大礫が集石している。遺物は細片化した多量の土器片とともに大中小3点の岩偶・岩版類が出土した。195SKの調査以降新たな見識は、骨片がA区南寄りの遺構群を中心に見つかったことである。さきに示したマサノ沢遺跡の中核遺構である集石遺構160SXから、礫の輪郭を精査する作業中に骨片がすでに見ついていた。160SXは広い範囲であるため、堆積状況などに新しい堆積層の混入も考慮しておく必要があった。ところが、195SK例は1m前後の規模の土坑であるから、検出から掘削にいたるまで混入の可能性が低い。しかも、骨片として認識できる数も多い。その後、礫を伴う遺構以外にも確認され、骨片はA区南側の調査区を中心に1000点を超える資料数となった。骨片は現在同定中であるが、ほぼ全ての骨片が焼骨であり、部位が判明する可能性の骨片もあり、人骨だけでなく獣骨なども予想される。

そのほか、遺構配置で注目されるのは配石遺構と大型土坑の組み合わせがいくつか指摘できる点である。094SX+190SK+191SKもその一つであるが、基本的には360SX+357SKのように、2m前後の土坑に1×0.5m前後の配石遺構がセットになる場合が多い。当然、土坑の大多数はセットにならない単独の大型土坑と長楕円形の遺構である。

- 17B区 B区はA区の南を中心に遺構が展開している。調査前の水田造成時に削平が進み、遺構がないと予想していたところ、地形的にはA区より低くなる旧地形であったため、耕作土および床土を除去すると長楕円形を中心に、円形の大型土坑も確認された。骨片を伴う遺構はA区寄りの遺構に見られたが、それ以外はほとんど確認できなかった。A区は大～巨礫が配石墓や土坑などの遺構に伴うほか、160SXをはじめ配石・集積の密度が高かった。一方B区は集石など遺構に伴う礫群は遺構全体の半数近くあるが、遺構外の集石は調査区西側の川側一部を除いてほとんどなかった。また、A区南側に比べ遺構の密度も低い。今後の検討課題だが、A区とB区に遺構群の性格が異なる可能性がある。それは、おそらく集石遺構160SXに隣接する遺構群とそうでない遺構群に相違点があるのかもしれない。

- 土器棺墓 弥生時代前期を中心とする遺構は、おもに土器棺墓である。総数は6基、その内訳は古い時期から、五貫森式が3基、檜王式が1基、水神平式が2基である。186SKの2基並立した例を除く全てが単独の土器棺で、重複や隣接する事例はない。以下、個別に示す。

- 186SK 186SKはA区の北側と南側の間にあった水田造成に伴う石垣の直下で見つかった。そのため造成土が厚く堆積し、その下位に造成土に関連する不定形な落ち込みである091SXと059SXは重複して5m前後の範囲に確認された。深さ0.5～1m前後の059SXが外側に、深さ0.5m未満の091SXが内側に重なった中央からやや西寄りに186SKを検出した。2つの不定形な落ち込みの底面は凹凸があり、黄褐色礫層の基盤層が上位面近くまで高くなるところもある。186SKは基盤層が高くなる付近にあった。土坑は長軸1m、短軸0.5mを測りそのほぼ中央に土器の口縁部が1周する個体と割れた胴部片が1周する個体が接しながら南北に並存して見つかった。断ち割り掘削により、北側の土器は口縁部を下位に胴部上半までの倒立した状態、南側の土器は口縁部を上位に胴部下半までの正位に設置された状態で確認された。いずれも底部付近は欠損しており、口縁部から胴部までの筒状であっ

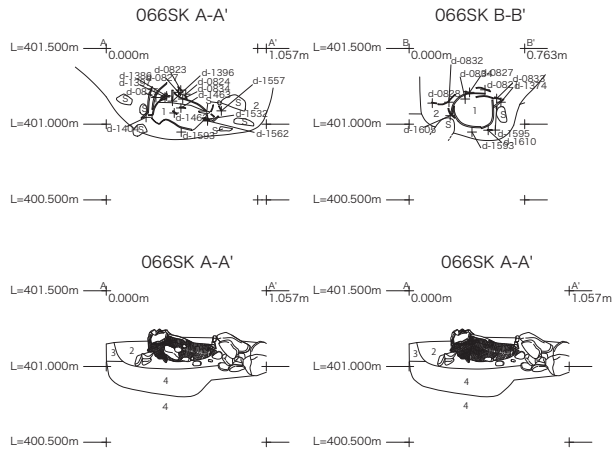
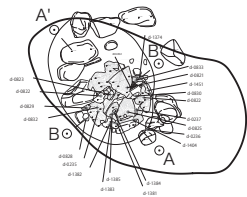


縄文時代後期遺構詳細図

た。北側の土器は口縁部が無突帯、頸胴部界は緩やかな有段、幅の狭い頸部に横方向のナデ調整、胴部は左斜め上がりの条痕が見られる。南側の土器は口縁直下に刻目突帯が1周めぐり、頸胴部界は有段となり幅の狭い頸部に横方向の条痕が施され、胴部は左斜め上がりの条痕が見られる。いずれも五貫森式古段階の特徴を示す土器である。北側の土器は胴部上半までしか残存していなかったが、おそらく設置後に上位部分が削平された時に土器内部に同一個体の胴部片が入り込んだと推定できる。南側の土器の内部は小礫のほか、石鏃や剥片石器などが確認できた。186SKの例は初見である。それぞれが単独に出土する例はあるが、今回のように同時期の正位と倒立の土器が2個体並立して設置されている例は今後検討を要する。現状は両者ともに土器棺墓の1例として取り上げておく。

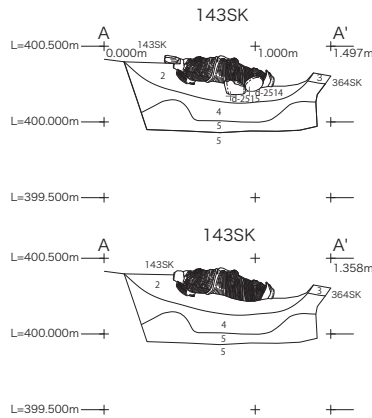
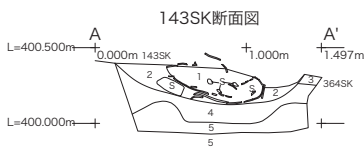
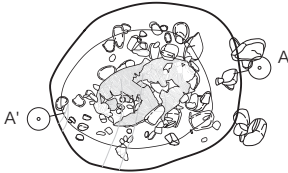
- 095SK 095SKは調査区西壁で検出した北側へ傾く斜位に設置された土器棺墓である。縄文時代後期の大型土坑に重複する土坑で断面観察の結果、50cm前後の円形土坑に土器棺が設置されていたと判断した。蓋になる土器や礫はなかった。一方、底部付近に2～3重に土器片を用いて覆っていた。さらに底部は打ち欠きで欠損していたが、破片で底部を覆っていた。つまり、棺身の底部付近に土器片を用いて塞いでいることがわかった。なお、棺身内部の埋土から大破片の土器が数点出土し、これらが棺身の蓋であったかは検討を要する。棺身は口縁端部が丸く凸状になり体部に粗めの斜位条痕を施す五貫森式の深鉢である。
- 427SK 427SKは浅く整った横方向の条痕深鉢を棺身とする立位の土器棺墓である。土坑の掘り方は棺身より少し大きい50cm前後の楕円形である。検出時、土器棺の口縁直上に半周にわたり礫を配置していた。これら礫の直下あるいは周辺に粗い横方向の二又工具による条痕深鉢片が点在していた。土器棺を断ち割って掘削を進めると、正位の口縁から底部付近までの土器が北側1/3程度崩れているものの、良好な状態を保ちながら設置されていた。口縁部は外反せず、端部が凹線状にくぼむ強いなでが施されている。崩れた部分には検出時に一部確認していた土器片と同一個体の条痕深鉢片が大破片で含まれていた。これらは棺身の上に設置された土器片蓋と思われる。棺身は底部が打ち欠かれ欠損している。棺身は筒状に設置され、その下位には、蓋と同一個体とみられる大破片を敷いていた。これら土器の特徴から檜王式の土器である。
- 066SK 066SKはA区北側の043SXに南側で重複する長軸1.5m短軸0.8mを測る土坑の中央に設置された重厚に蓋を配した横位の土器棺墓である。検出当初は043SXの竪穴状遺構に関連する土器集積と考えた。大型土器片が折り重なって確認され、遺構の輪郭も不明瞭であった。そこで、043SX内を下位に掘り進め再検出したところ、土坑の輪郭がつかめ、043SXと別遺構と判断した。折り重なる上位の土器片を外して行くと、北西側に口縁部、南東側に底部を軸にして設置した深鉢が棺身であるとわかった。口縁部側は別個体の底部欠損の深鉢が倒立した状態で、少なくとも3個体分を重ねて設置していた。一方、底部側は底部を打ち欠き欠損させ、その部分を別個体の胴部片で覆っている。棺身の口縁部直下に、別個体の口縁から底部まで残存する1/4周の大破片を敷いて棺身の口縁部を少し持ち上げている。棺身に隣接して中～大礫を用いて固定し設置している。棺身を含めて3個体以上の個体を用いて構成された土器棺墓はすべて口縁部が外反する二又工具で口縁直下から底部付近まで縦位羽状条痕の深鉢である。口縁端部に押引や条線を加える違いはあるが、水神平式深鉢である。
- 143SK 143SKは縄文時代後期の土坑群と重複する長軸1.5×短軸1mを測る楕円形の土坑に、横位に設置された合口の土器棺墓である。調査区を横断するトレンチ9掘削時に確認され、

066SK



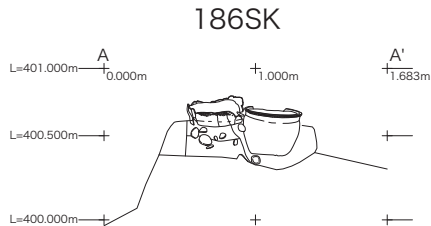
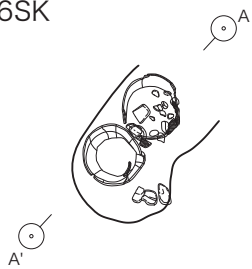
1. 10YR3/2 黒褐色中粒砂質細粒砂層 褐色細粒砂ブロックを少量含み、細礫含む。遺物を含む。
2. 10YR3/3 暗褐色極細粒砂質細粒砂層 黄褐色中粒砂小ブロックを含み、細礫少量含み、大礫の亜角礫を多く含む。遺物を含む。
3. 10YR5/6 黄褐色中粒砂質細粒砂層 褐色中粒砂大ブロックを多く含み、細礫多く含む。漸移層。トレンチ4セクション4層に対応。基盤。
4. 10YR5/6 黄褐色粗粒砂質極粗粒砂層 細礫を非常に多く含み、大礫の亜角礫を非常に多く含む。北壁セクション10層に対応。基盤。

143SK

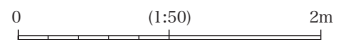


1. 10YR2/2 黒褐色細粒砂質極細粒砂層 細礫少量含む。遺物を含む。143SK埋土。
2. 10YR2/2 黒褐色細粒砂質極細粒砂層 細礫少量含み、中礫の亜角礫を多く含む。遺物を含む。143SK埋土。
3. 10YR3/3 暗褐色極細粒砂質細粒砂層 黒褐色細粒砂ブロックを含み、細礫含み、中礫の亜角礫を少量含む。遺物を含む。364SK埋土。
4. 10YR3/3 暗褐色極細粒砂質細粒砂層 褐色細粒砂ブロックを含み、細礫少量含み、中礫の亜角礫を少量含む。遺物を含む。別遺構埋土か。
5. 10YR5/6 黄褐色中粒砂質細粒砂層 暗褐色細粒砂ブロックを含み、細礫含み、中礫の亜角礫を少量含む。漸移層。トレンチ4セクション4層に対応。

186SK



1. 10YR2/2 黒褐色粗粒砂質中粒砂層 細礫多く含み、中礫の亜角礫を多く含む。遺物を含む。186SK土器(北)内面埋土。
2. 10YR2/2 黒褐色粗粒砂質中粒砂層 細礫多く含み、中礫の亜角礫を多く含む。遺物を含む。186SK土器(南)内面埋土。
3. 10YR2/2 黒褐色細粒砂質中粒砂層 細礫多く含み、中礫の亜角礫を含む。遺物を含む。186SK埋土。
4. 10YR2/2 黒褐色粘土質シルト層 褐色シルト大ブロックを含み、細礫少量含み、大礫の亜角礫を多く含む。炭化物を極少量含む。遺物を含む。091SX埋土。
5. 10YR5/6 黄褐色粗粒砂質極粗粒砂層 細礫非常に多く含み、大礫の亜角礫を非常に多く含む。北壁セクション10層に対応。基盤。



縄文時代末～弥生時代前期遺構詳細図 (1:50)

この時点で上位に礫の設置や盛土の痕跡はなかった。遺構検出時は埋土が比較的わかりやすく楕円形の土坑を検出した。土器棺はこの土坑の中心にあった。土器棺の周りには中～大礫が棺に接し点存在していた。断ち割りの断面観察時も礫が土器棺の下位に接して点存在していたことから、棺身を固定するために設置された礫と考えた。側面観から北側の土器が南側の土器の中に入り込んでいることがわかった。土器を取り上げながら内部の状況から、北側の土器は外反する部分の口縁部を打ち欠いていることがわかった。さらに北側の土器を持ち上げるために打ち欠いた口縁部片を底部付近と合口部周辺の直下に設置していた。つまり、横位ではあるが片側をやや持ち上げた斜位の状態であった。これら2個体の土器は水神平式で、口縁部が外反する外面に二又工具による縦羽状条痕深鉢であった。

土器棺墓のほかに、土坑、竪穴状遺構などが数カ所確認されたが、縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺構は、縄文時代後期の遺構とくらべ1割に満たない。

以上、縄文時代後期の墓地に関連する石棺墓・配石墓および大型土坑を中心に調査の経過を交えて示した。続いて、縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器棺墓を中心に個々の土器棺墓の設置方法を加えて示した。マサノ沢遺跡のおもな遺構群はこれら2つの時期を中心とする墓地関連遺構である。

縄文時代後期について、調査段階では竪穴建物など居住地に関連する遺構が確認できなかった。竪穴状遺構に付属するピットはいくつか存在したが、炉跡を付帯する竪穴建物はなかった。柱痕をもつピットはいくつか確認したが、調査時に建物の柱として配置を認定するにはいたらなかった。

大型土坑の重複に特徴があった。大きく重複するのではなく、遺構の縁辺が重なる程度の重複が多く、それが各遺構数カ所ある。これらの特徴的な重複は大型土坑を掘削するときに、直前の大型土坑の存在を意識していたと考えたい。つまり、墓壇を構築していくときに規範があったと想定する。今後は遺構の重複関係を精査して規範の是非を検証していきたい。

弥生時代前期は6基の土器棺とそのほか土坑を数カ所確認した。縄文時代後期と同様に炉跡を付帯する竪穴建物はなかった。土器棺を6基確認したが、一ヶ所に集中しているのではなく、散在して分布している。地形的な側面からみると、段丘の縁辺に設置されていることは指摘できるが、規則的に並んでいるとはいえない。50基程度まとまっていれば大規模な墓地あるいは集落も想定できる。マサノ沢遺跡の土器棺墓は小規模な墓地である。

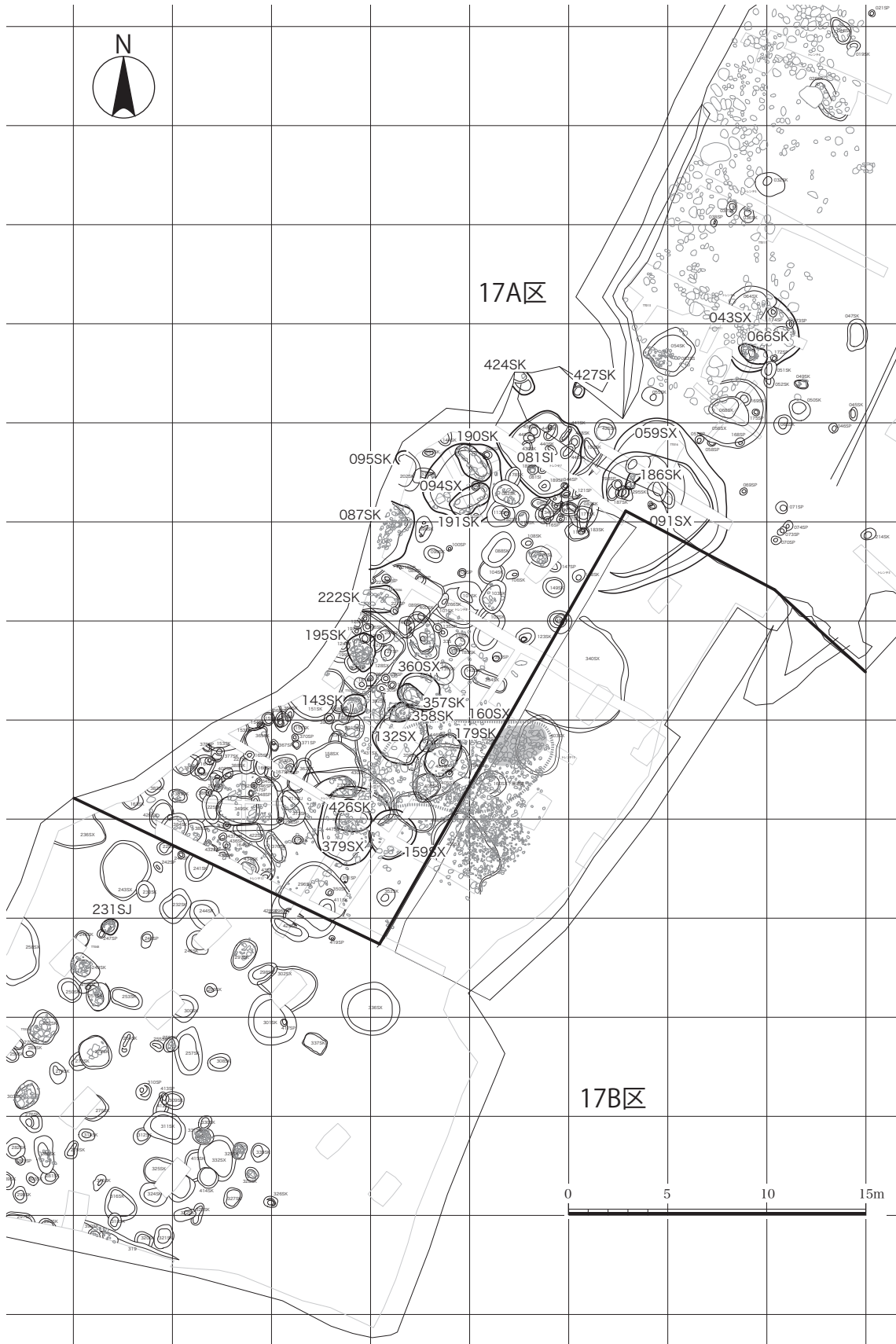
出土遺物の時期は長期間にわたる。土器を中心に示すと、縄文時代中期後半から弥生時代後期まで、さらに近代の陶磁器もある。これらのうち、遺構の中心となる時期の前後が数量的には多い。

特筆すべき遺物としては、ハート形土偶など縄文時代後期を中心とする祭祀具であろう。

ハート形土偶は、東西南部から北関東を中心に分布する土偶である。県内はもちろん、東海地域の確認例はない。持ち込まれた土偶だとすれば遠隔地交流の一端を示す好資料である。また、同一土坑内から線刻をもつ岩偶・岩版類も出土している。時期比定や使われ方の検討に布石となった。

岩偶・岩版類は有溝石錘、切目石錘を含めると20点以上出土している。なかでも、さきに示した配石墓195SXから3点まとまって出土した岩偶・岩版類は同じ形態の大中小であり注目しておきたい。

(永井宏幸)



マサノ沢遺跡 2017 年度遺構全体図 (1:300)



160SX 周辺



186SK 断ち割り状況



094SX



427SK 断ち割り状況



190SK



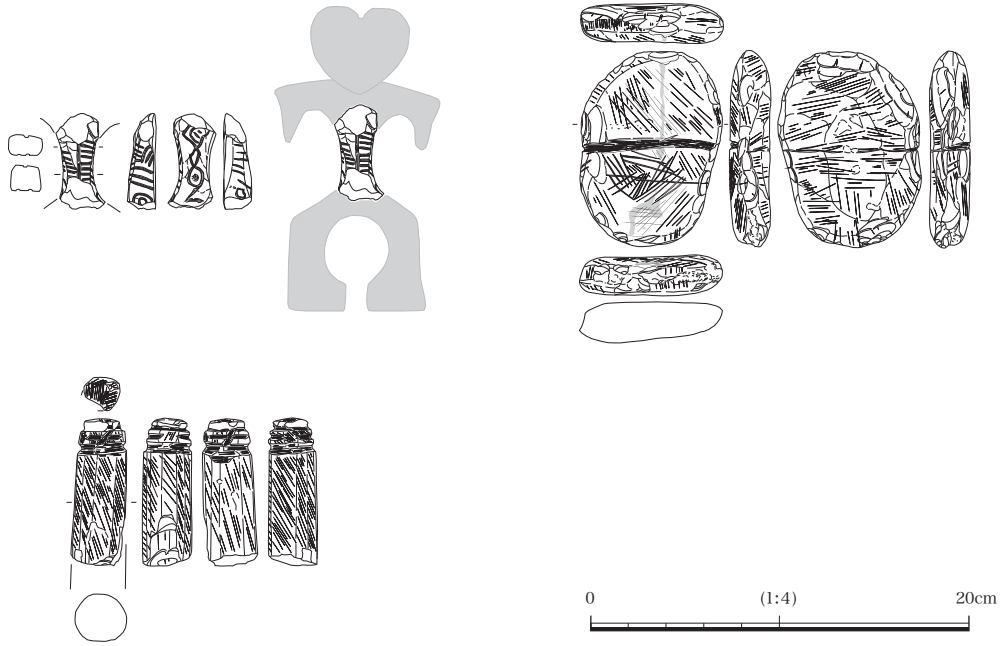
066SK 断ち割り状況



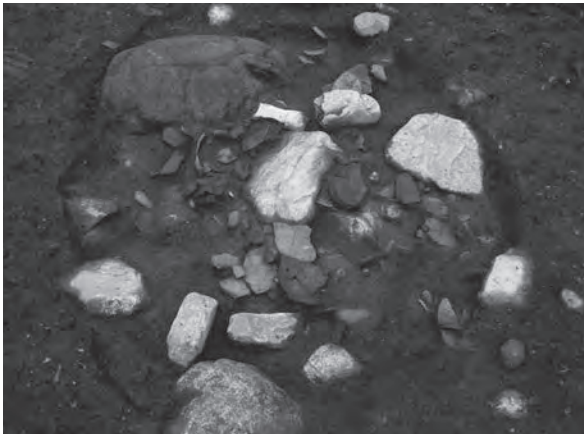
195SK



143SK 断ち割り状況



マサノ沢遺跡遺物実測図



179SK 遺物出土状況



石棒・石刀類出土状況



岩偶・岩版類 (195SK)



有溝石錘 (426SK)